

Newsletter for JADR

I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して

JADR 会長 村上 伸也

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学分野)

高野吉郎前会長 (2009-2010) を引き継ぎまして、本年1月1日付けで第29代 JADR 会長に就任致しました。どうぞよろしくお願いたします。歴代の会長が記しておられますように、1954年に16名の会員で発足した JADR が、現在では会員数2000名を超え、IADR の組織の中で世界第2の Division へと発展いたしました。昨年、第88回 IADR バルセロナ大会においても全6,400名の参加者のうち、日本からの参加者が1,048名と報告されており、IADR の学術大会においても会員数の比率に匹敵する activity を JADR は披露していると言えるでしょう。新体制となりました理事会メンバー、評議員の先生方、会員諸兄のご支援とご協力をいただき、これからも日本の歯科医学研究の成果を世界へ発信していくお手伝いをしていきたいと思っております。

私は、岡田 宏先生 (大阪大学名誉教授) が JADR の事務局長・会長をされていた頃、幹事として JADR 理事会のお手伝いをさせていただいたことがあります。その当時の理事会でも、IADR における JADR の位置づけや国内における JADR の存在意義などが盛んに議論されていたことが思い出されます。しかしながら、当時の会計規模を考えると、まだ不安定な要素が十分に払拭できず、いわゆる「手弁当」的な活動を理事の先生方は余儀なくされていたような状況であったと記憶しております。その後、大谷元会長 (東京医科歯科大学) からお声をかけていただき、2005年から JADR の会計担当として理事会に加えていただくことになりました。「現状の予算規模に匹敵する事業計画を展開することで、会員の先生方への会費の還元を図りましょう。」とする当時の理事会の機運に接し、10年ほどの間に JADR が大きな変貌を遂げていたことに感銘を受けたのを、鮮明に記憶しております。

2005年以降の JADR の取り組みとして、Hatton 賞 (第10代 IADR 会長の Edward Hatton 博士の功績を称えて設けられた若手研究者を顕彰する賞) の国内代表選考会の充実をはかり、同選考会も全て英語で presentation をしてもらおうようになりました。2005年以降だけを見ても 1st Prize 2名を輩出しています。また、JADR 自体でも若手研究者を encourage することを目的として、JADR 学術大会での優秀若手発表者に対して学術奨励賞を授与しています。さらに、アジア諸国との交流を促進する一助として、アジア地域の IADR division, section に所属する若手研究者が日本の歯科医学研究に、そして多くの日本人研究者に接する機会を提供することを目的として、これら

division section を代表する若手研究者に対して travel award の提供を行っています。そして、九州歯科大学を会場として開催されました2010年 JADR 学術大会より、全ての発表を英語で行うようになりました。このように、シニアの研究者のみならず、大学院生も JADR を gateway として国際舞台で発表することが普通に行われるようになったと言って、もはや過言ではないでしょう。今後も英語で discussion する経験を重ねていくことで、JADR からの情報発信力は確実に高まっていくものと期待されます。

ところで、JADR の会員としてのみならず IADR の一会員として、学術面のみならず IADR の運営や様々な国際貢献にも寄与する機会を先生方はお持ちでしょうか。残念ながら、この方面では JADR は IADR 第2の division としての貢献がまだ十分にはできていないのでは、と私は感じております。先生方もご存知のように、IADR には24の Research Group が組織されています。そして、各 Research Group は IADR 学術大会開催時に、Business Meeting を開催しています。そこで、JADR 会員の先生方をお願いしたいのですが、是非この機会に先生方が専門とされている分野の Research Group のメンバーになっていただき、IADR 学術大会の折に開催されている Business meeting に参加していただきたいと思っております。そして、先生方自らの発言で、IADR を変えていく機会を持っていただけたらと思います。その様な活動をされる際に、JADR がお手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください。

ご承知のように、私は選挙を経て会長に選出させていただきました。しかし、その制度にもまだ改善していかなければならない課題が残されているとのご意見も頂戴しています。一般会員の先生方の理解が得られるよう、一層の JADR の「透明性」を確保していく必要があると感じています。

2年間の会長職の間にどこまで目標を達成できるかは分かりませんが、理事会メンバーの先生方のご協力と会員諸兄のご支援を得て、会員の先生方からのみならず国際的にも信頼される JADR になれるよう、微力ながら尽力して参ります。どうかよろしくお願いたします。

II. 会長任期を終えて

高野 吉郎

(東京医科歯科大学大学院硬組織構造生物学分野)

2010年12月末日をもって2年間の会長任期を終えました。無事に任期を全うできましたのは、献身的に学会活動を支えて下さった理事ならびに役員各位のご尽力と、常に高所から会の軌道修正をして下さった元 IADR 会長 黒田啓之先生のご指導のお陰と、深く感謝しております。

さて、この2年間で振り返り JADR 関連の特筆すべき出来事を挙げるとすると、Asia/Pacific Region (APR) の発足による学会活動の新たな枠組みが構築されたこと、及び JADR 学術大会使用言語の完全英語化が実現したこと、の2点に絞られるかと思えます。以下にこれら2点の具体について若干の私見を交えつつご報告し現状確認をするとともに、次期執行部のもとでの本会の益々の発展を祈念する次第です。

1. Asia/Pacific Region (APR) の発足と第1回 APR 学術大会の開催

IADR の世界規模での組織改革構想の柱として、旧来の枠組みである Federation が廃止され、世界の Division, Section を地理的に5つの Region に区分けする Regionalization が実施されたことは、JADR の国際戦略にも深く関わる大きな変革といえます。これにより日本は Australian/New Zealand Division, Chinese Division, Korean Division, Japanese Division, Southeast Asian Division の5つの Division と Indian Section, Mongolian Section の2つの Section で構成される Asia/Pacific Region (APR) の一員となったわけであり、Federation と Regional System の最も大きな違いは、これまで IADR Board からの一方的な指名で決められていた Regional Board of Director の人選が各 Region に任されたこと、すなわち Region を構成する Division, Section 自らが選出した代表を IADR 本体の Board へ送り込むことができるようになったことです。しかし固有の代表を選出したとはいえ、共通の財政基盤を持たない「枠組み」に過ぎない Region の実体と活動の方向性は未だ臆と云わざるを得ません。ただ、IADR の規約では各 Region は数年ごとに1度、学術大会 (Regional Meeting) を開催することが求められており、当該年度は各 Division, Section は固有の国内大会を開催しないことが定められていることから、好むと好まざるに関わらず今後の JADR の活動は Region の活動と連動して組み立てて行くことが必要となります。こうした縛りの中で2009年9月に APR の第1回大会が中国武漢市において開催されたことは記憶に新しいところです。第1回大会は日本からの約100名を含む国内外からの多数の参加を得て大変な盛会となりましたが、武漢大会は会期直前まで運営やプログラム構成が不明確であったことから、JADR としては独自の学術セッション等の

企画申し入れは控えることとした経緯があります。JADR の武漢大会での公式活動は第57回 JADR 総会を開催したことと、学術奨励賞のコンテストを実施したことに留まりますが、同大会では幾つかの Division がそれぞれの Hatton Award 国内代表選考会を行っていたことは注目されることです。これからの APR の動向をしっかりと見きわめて行くことが前提となりますが、JADR も APR 大会の場を活用して、アカデミックな活動を各国に対し組織的に提示して行くことも今後は必要でありましょう。

APR の第2回大会は2013年にタイのパタヤあるいはバンコクで開催される見通しです。その際にも JADR 学術大会は第2回 APR 大会と併催となり、国内大会は開催されないこととなります。日本の Dental Science の海外への発信母体としての JADR のミッションを考えると、当該年度は国内向けシンポジウムを開催するのではなく、むしろ APR の場で日本のサイエンスを発信する企画を積極的に提案する方向で検討されることを望みたいと思います。

2. JADR 学術大会における使用言語の完全英語化

最近、文部科学省の支援で動いている医歯学系の大学院教育改革プロジェクト採択校の事業報告会を聴講し、各校の取り組みの様子を知る機会がありました。そこで印象に残ったのは、いずれの大学も将来の研究者に求められる英語能力開発の重要性を認識し、大学院レベルでの英語教育の重要性を強調していることでありました。ここでいう英語は論文の読解、執筆のための英語力も含まれますが、それよりもむしろ学会等でディスカッションができるだけの実践的英語能力を高めることに主眼が置かれていると感じました。逆にいえば、未だにそのあたりが我々日本人の弱いところということになります。その意味で、昨年11月に西原達次会頭の陣頭指揮のもと、九州歯科大学で開催された第58回 JADR 学術大会で大会使用言語の完全英語化が実現したことは、JADR 学術大会に若手研究者の英語発表能力涵養の場としての価値が付加されたことを意味し、日本の歯学研究の海外発信母体としての JADR にとって、大きな前進と考えています。全面協力をいただいた西原教授には感謝の言葉もありません。

その他、この2年間で達成された重要事項として、日本歯科医学会 (JADS) との関係の明確化に向けた一連の調整が進み、JADR と JADS の連携強化がなされたことを挙げておきたいと思えます。また、懸案であった JADR 倫理委員会規則が第58回総会の場で制定されたことも、本会にとって大きな前進といえます。倫理規定の草案策定も併せ、同委員会規則の制定に多大なご尽力をいただいた大谷啓一教授に、この場を借りて御礼申し上げます。

最後に、学会事務全般を統括し会務の円滑な進行を可能にしてくれた、アカデミックスクエア 中倉佳奈子氏に感謝の意を表して退任のご挨拶と致します。



Ⅲ. 新任・退任理事からの挨拶

1. 理事退任に際して

田上 順次

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 歯制御学分野)

2005年から5年間理事として執行部に加えていただきました。この間、せっかくの機会をいただきながら、学部長ということもあり、十分な貢献をすることができなかったことを自省し、お詫び申し上げます。たくさん得難い経験をさせていただきましたこと、厚く感謝申し上げます。特に近年の動きとしては、第一回の Asia Pacific Region の学会が武漢で開催されたこと、JADRの大会が英語で発表するようになったことにみられるように、国際化に向けて大きく変化してきたことかと思えます。

日本の歯学教育が収縮傾向にある中、歯科医学研究の推進には留学生を活用することは極めて重要です。留学を考えている若手研究者に対するアピールとしても、国際学会や国際誌での発表は必須です。また日本で学ぶ留学生のためには、国内でも英語で発表できる場を提供して初めて、国際化の準備が整ったといえます。

何年も前になりますが、教室の日本人大学院生の発表に際して、「英語でも可」ということでしたので、英語で発表させたことがあります。当時は大学院に10月開始の国際コースが開設され、私の分野での大学院の講義はすべて英語で行うことにしたところでした。面白いことに大学院講義を英語で行うという情報が伝わると、学内の留学生は専門領域が違っても受講しに駆けつけます。留学生は増えても彼らの参加しやすい、英語のプログラムが少なかったということです。

国際学会での質疑にしても初めての発表ではだれでも緊張しますが、そのトレーニングの場としてもJADRは有効に使えます。質問の仕方や討論の展開についても、とてもよい経験のできる場であると思えます。

武漢の学会も忘れることができません。中国に何度も出かけておりますが、武漢は初めてで、内陸の都市の状況は非常に驚きでした。何度も行きたいという場所ではありませんが、これは上海や北京の中国の友人に聞いても同様の意見でした。それでも非常に多くの演題、参加者により大盛会となったのは、JADRもさることながら、東南アジアの部会が正式に参加したことも大きな要因だったと思います。個人的には、たまたま発表に来ていたプラハ大学の大学院生が、話してみると昔私の教室に留学していた人物の弟子であったことが分かり、大いに盛り上がったことです。ポスター発表でしたが、ヨーロッパの発表は珍しかったので冷やかしに行っただけでしたが、不思議な縁に結ばれていました。当人は将来は日本に留学したいとのこと、今も連絡を取り合っています。アジア地区での国際プログラムは、日本の留学生政策に大いに活用できるようです。

毎年理事長以下、役員の方の尽力により、JADRの活動も変化を遂げてきていますが、日本の学会の中では先陣を切ってさらに国際化を推進していただきますよう期待し、今後も微力ながらお手伝いできれば幸いです。

2. 理事退任のご挨拶

—リサーチマインド涵養のためのパラダイムシフト—

佐野 司

(東京歯科大学歯科放射線学講座)

この度、JADR理事を退任させていただくこととなりました。会長でいらした小田豊先生、高野吉郎先生はじめ役員の方から、これぞJADRメンバーという豊富な学識および先見性と寛容さを幾度となく見せていただき、それらを拝見しているだけでも私にとっては大変勉強となりました。

唐突ですが、JADR 学術奨励賞選考について触れさせていただきます。本賞はJADR 学術大会での研究発表活動を奨励するとともに、歯学の発展に寄与する若手研究者の育成を目的とするもので、38歳未満の若手の方が対象となります。その選考に係る理事会に出席をさせていただいた際に、JADRの真骨頂を見せていただいた気がいたしました。選考方法をめぐっての議論があり、些細な正当性に関するのではなく、より多くの有望な若手研究者に賞を与えるためにはこの選考方法でよしいのか、という議論でした。

IADRの使命は人類の健康を守る先端歯学研究の推進と、世界中の人々に健康をもたらすために国際地域への学術的支援をはかることであり、JADRもIADRの部会としてその一翼を担っております。高野前会長がNews LetterでJADRという表記に「国際歯科研究学会の日本部会」の意味が含まれておらず、これは日本固有の総合歯科研究学会として発展してきた本会の歴史と自負がその背景にあったものと推察されます、と書かれています。その言葉通り、使命も目的も共有するところは多いですが、IADRとは一線を画すものがその根底に脈々と流れている感があります。その大きなものが若手研究者育成への熱意だと思えます。

現在、日本でも米国式のDental school構想が出ております。御承知のように4年生大学を出た学生さんがDental schoolに入学し、4年を経て歯科医師免許を取得するのがDental Schoolのシステムです。歯科界としては、他領域を目指した学生さんの目を是が非でも歯科に向けさせようと画策するのは至極当然です。しかし、Dental school構想の真意は、教養人の育成にあると考えます。すなわち、Dental schoolに入学する前の4年間で倫理感やコミュニケーション能力を持ち合わせた職業人として相応しい人格形成がなされ、その後生涯教育を含め歯科という専門分野を学ぶことにより、リサーチマインドが醸成され、優れた歯科医師が輩出されることとなると考えます。

現行のシステムで、リサーチマインドが醸成できないということではありません。理事就任時に申し上げましたが、JADRは専門領域が多岐にまたがり、国際的な交流を密に行うことができる日本における唯一の学際的な組織です。さらに、JADRの若手育成の熱意は、学部学生や大学院生を含めた多くの若手の歯科医師のリサーチマインドを活性させると考えます。そこで、JADR発信のリサーチマインド涵養のための歯科界全体のパラダイムシフトをしていただくように村上伸也会長はじめ会員の先生方をお願いをする次第でございます。本当に勉強をさせていただいた4年間でした。ありがとうございました。

3. 理事退任のご挨拶

中嶋 裕

(明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科生体材料学分野)

2007年から小田豊会長ならびに高野吉郎会長のもとでJADR理事を微力ながら務めさせていただきました。任期中には学務等のために理事会等に出席できないことがありましたが、両会長ならびに理事の先生方の温かいご理解に加え、いろいろと助けて心よりいただき感謝しております。IADRにおいては、JADRよりFellowship Committee委員として推薦していただき、さらに2009～2010年にはIADR/Fellowship Committee Chairを務めさせていただき、国内外でいろいろと勉強する機会を与えていただいたことに、JADR会員ならびに役員の先生方に御礼申し上げます。

IADRのもとのJADRの活動と運営には改めて認識を深くいたしました。日本における歯科医学・口腔医学研究の質と量は、決してIADRにおいて正当に評価されていない状況であることは多くの先生方が感じていることだと思います。JADR執行部では、日本から発信する研究をいかにIADRの中でインパクトのあるものにするのか、そのために組織としてどのような、ロビイ外交も含めた働きかけをしていくのか等、日本国内への視点だけでなく国際的な視点と行動をとることに努力していることを痛感いたしました。すでに始まったすべての分野におけるグローバル化の波は、今後はさらに加速してゆくと思えます。IADR本部においても従来からのIADR運営から脱却し、Restructuringをすでに開始しております。IADRの中でJADRの発言力をさらに上げてゆくにはこのグローバル化に対応する変化の中でのJADRの活動をどのように進めるのかが重要であると思えます。

4年間のJADRの運営に携わってみて感じたことのもう一つは、日本の大学人を含めた研究者は、自分の専門分野における学会への帰属意識が高すぎる点です。研究分野の専門性を考えれば当然であります。この強すぎる帰属意識がJADRのさらなる発展を妨げる可能性があると思えます。ご存じのようにJADRは、各専門領域を横断的に結びつける組織です。専門分野の学会活動とJADRの活動が大きく異なる点を、多くの研究者に理解していただきたいと感じました。このような理解の普及はJADRの活動を強く後押しし、ひいてはIADRでのJADRの発言力だけでなく日本人による研究のアイデンティティの向上に貢献し、結果的に研究者個々に還元されてくるものと考えます。

新しい年を迎え、村上伸也JADR会長をはじめとした理事・役員の方のこれからのご活躍によりJADRの活動がますます発展してゆくことを祈念申し上げますと共に、私たちJADR会員一人一人がJADRに理解と協力を積極的に行ってゆくように心してゆきたいと思えます。最後になりましたが、中倉さんをはじめとして、JADR事務局の皆さまには大変お世話になり深く感謝しております。

4. 第三の開国におけるJADRの役割

花田 信弘

(鶴見大学歯学部探索歯学講座)

日本の凋落

中国の台頭に反比例してアジアにおいても世界においても日本の存在感は相対的に希薄化しています。国内総生産(Gross Domestic Product: GDP)が世界経済に占める割合の変化を見ると、これからの世界経済のメインプレイヤーが日本ではないことがわかります。世界経済だけでなく、様々な統計データは日本の凋落を示しています。とりわけ歯学部の凋落ぶりは目を覆いたくなるほどです。日本の歯学生は国家試験対策で予備校化した学生生活を送り、輝きを失い精神面で抑圧されているように思えます。一方で多くの優秀な外国人学生が日本で勉強しています。当講座だけでも一年間に7名の外国人学生をスウェーデン・ウメオ大学から受け入れました。現在はタイ国チュラーロンコーン大学歯学部を卒業した歯科医師や、バングラデシュ国ダッカ大学歯学部を卒業した歯科医師が、当講座に在籍しています。世界の大学は日本に多くの学生や研究者を送り込んでいます。しかし、外国人研究者が日本に長期居住することは難しく、やがて彼らはカナダや米国に去って行きます。

グローバル化する世界とローカル化する日本

20世紀の世界は国境で分断され、教育と医療は国単位で完結していました。現在の日本の指導者は国単位で完結することが当然の時代を生きてきたのです。ところが21世紀の現在は、国境の壁を低くなり教育と医療も一体化を始めています。トップレベルの日本の高校生が国内ではなく海外の大学へ進学する時代です。グローバル化した世界では、企業だけでなく教育や医療も変わらなければなりません。世界の構造が急速に変化しているにもかかわらず、日本国内の変化は緩慢です。日本では国内市場に安住していた企業が多く、グローバル化の流れに乗り遅れた面は否めません。それだけでなく現在の日本では、社会も個人も内向き志向を強める傾向さえ見受けられます。歯科大学・歯学部も同様です。日本語の国家試験と日本でだけ使える国家免許制度の中で外国人との競争がなく安住しているように思えます。グローバル化する世界の中で日本の大学はローカル化し、日本国内の学生を教育することだけを考えています。これではいずれ日本の大学は歯学部に限らずすべての学部で質の低下が劇的に起こりやがて立ち行かなくなると思われます。現在多くの私立歯学部が経験している現象です。

伝えるものがあれば語学の壁はない

ところがローカル化する日本を一気に変える動きもあります。環太平洋戦略的経済連携協定(TPP)の締結です。TPPによって、日本の役所は劇的に変化すると予想されています。TPP締結後は日本語による非関税障壁の撤廃が国際的に義務づけられるので、中央政府と地方政府は非英語表記による国際障壁をすべて撤廃しなければならなくなります。具体的には政府や地方自治体が行う競争入札の表示は英語表記が義務づけられます。中央政府が行う国家試験も非英語試験問題による国際障壁が問題視され、英語で外国人の学生が受験できるようになるでしょう。歯科医師国家試験も例外ではありません。

ん。特に国公立大学歯学部では非英語講義による国際障壁を撤廃しなければならなくなりますから日本語と英語によるバイリンガル教育が義務づけられることになるでしょう。これは一見たいへんな変化のように見えますが、学生と教員の間、患者と歯科医師の間では英語であれ日本語であれ、学問を極めて相手に伝えるものがあれば語学の壁は問題なく克服できるでしょう。

そのような時代を政府は第三の開国と位置づけています。歯科専門学校から数えると多くの伝統校が創立100年を迎えています。これまでは100年間の日本語教育の時代でした。日本語による鎖国の時代と言っても良いでしょう。ようやく長い鎖国が終わり、歯学部も第三の開国の時代に輝く時を待っています。開国後はJADRがすべての研究者のメインの国内学会になることは当然ですし、そのような時代を先取りする学会であってほしいと思います。幸いにも昨年のJADRは九州歯科大学の西原達次大会長の英断により（懇親会以外は）すべて英語の学会になりました。この伝統を続けることを希望してJADR理事退任のご挨拶といたします。

5. JADR 理事を退任するにあたって

前田 伸子

(鶴見大学歯学部口腔細菌学講座)

私は2005年度からJADR理事をお引き受けして6年間、理事としてさまざまな経験をさせていただきました。なんと言っても忘れられないのは2007年11月17、18日の会期で私が大会長として、鶴見大学で第55回JADRを開催したことです。原則的に毎年、国内で行われるJADRの学術大会（学会）では英語と日本語が公用語として使用され、抄録、スライド原稿、ポスターは全て英語で作成する決まりですが、実際の学会発表ではどちらの言語を使用しても良いことになっていました。私が理事として加わる前から、学会で公用語を英語のみとして、全面的に英語を使用することの可能性を理事会で検討されておられたようでしたが、鶴見大学で開催される第55回JADRから、それが実現できないかとさらに熱心な議論が理事会で重ねられました。結局、全ての発表を英語で行うにはもう少し時間をかけた方が良いとの結論になりましたが、第55回JADRでは、全てのシンポジウムに英語を母国語とする方あるいはそれに準ずる方に必ず加わっていただき、英語使用の機会を可能な限り増やすこととしました。さらに、当時のIADR会長であったDr. Deborah Greenspanとご主人のDr. John Greenspanをはじめとしてアメリカ、ドイツ、オーストラリア、韓国、台湾からトップレベルの研究者をお招きして、それまで以上に国際的な雰囲気を作り上げるべく、努力しましたが、申すまでもなく、JADR理事の皆さまと事務局、そして鶴見大学歯学部の全面的な協力がなければ実現しないことでした。また、第55回JADRからアジア環太平洋の若手研究者を対象としたJADR Travel Awardを設定したことも、この地域の若手研究者を積極的に支援する良いきっかけになったのではないかと自負しております。

英語を公用語としてJADR学術大会を開催することに関しては2010年度に九州大学の西原達次歯学部長を大会長として開催された第58回JADR大会から実現しました。全ての発表を英語で行い、多数の参加者をお迎えし、熱心なディスカッ

ションをいただき、成功裡に終了したと、西原先生がNews Letterで報告されておられました。

JADRの大会長をするという大きなイベントの他に、Hatton Award候補者国内選考委員会の委員長（2009年、2010年）をさせていただいたことも忘れられない経験でした。学部学生や大学院生、若手の研究者の方たちの素晴らしい研究成果を見せていただくたびに、日本の歯科大学／歯学部の底力を感じましたし、一緒に審査をする理事の先生方がご自分の領域とは違う分野の研究内容でも熱心に質問され、研究の進め方、発表の仕方などに関しても、的を得た指摘をされるその姿に私自身が学ぶことが多くあったことを申し添えておきたいと思います。

さまざまな要因が複合的に関わった結果、日本の歯科は未曾有の低迷期にあるように思います。しかし、身近にいる学生さんたち（本学の学部学生、大学院生を問わず）だけでなく、JADR/IADRでお会いするチャンスのあった他の歯学部／大学歯学部の方たちは目的意識が高く、基礎／臨床を問わず研究心が旺盛で素晴らしい可能性を秘めているように思います。いま、JADRができることは次世代を担う若い彼らが思う存分活躍する場所を提供し、世の中に歯科の魅力を理解していただくような機会を多く設けることではないでしょうか。理事を退任しても私自身の大学人としての時間はまだ残されておりますので、今後はJADRの一会員として、若い方たちの未来を明るくすべく努力を続けていきたいと考えています。

6. JADR 理事の退任にあたって

吉江 弘正

(新潟大学大学院医歯学総合研究科歯周診断・再建学分野)

この度、理事を退任させていただくことになりました。2年間という期間でしたが、お世話になりましたJADR役員の皆様と先生方並びに会員の皆様に心より感謝申し上げます。

任期中におもに二つのことをさせていただきました。一つは会長選考委員会、もう一つは、IADR Toshio Nakao Fellowshipの選定でした。

JADRの会長選出については、平成20年に変更があり、会長候補者としての条件が整えば自薦他薦を問わず会長候補者としての立候補できるシステムとなって2回目の選挙でした。今回の選挙を通して高橋信博先生が選出されました。

歴史的にみていかなる集団でも、多くの会員がリーダー候補者として立候補でき、公平なオープンな選挙を行ない、そして、つねにリーダーが変わることが、集団存続のキープポイントであると聞いたことがあります。それを実感した次第です。

次に、IADR Toshio Nakao Fellowshipですが、材料科学の領域において、優れた実績がある若手研究者に対して贈られるもので、母国以外の国の研究施設で6ヶ月間留学を支援するものです。応募者が少なかったことが気になりますが、若い研究者の支援はなにより重要である点において、このような奨学金制度の充実、IADRに限らず多くのアカデミーで、あるいは企業との連携においても行われるべきでしょう。

私が、理事就任した際に記述したことでもありますが、次世代の研究者を支援していくために、ポストドクのポジション増員、先進的研究領域への資金増額、橋渡し研究の充実、専門医制度と基礎研究の整合性などを挙げました。いずれも難

題ではありますが、目先の損得に惑わされず、長期的視野で声を大にして主張していく時でしょう。

国が国として成り立つための肝要なふたつの柱は、「教育・研究」と「医療・福祉」であり、この二つの柱が充実してこそ、安定した世の中になることを確信しております。

JADR の新役員による益々の発展と歯科医学の進展を期待しまして、退任のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

7. JADR 新理事を拝命して

山崎 和久

(新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野)

この度、村上伸也会長の下、会計理事を拝命いたしました新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野の山崎和久です。理事も評議員も未経験の私がいきなり会計理事ということで、職務遂行に対する不安も大きいですが、村上会長、高橋副会長、先輩理事の先生方にご指導いただきながら JADR の益々の発展に少しでも貢献できる様精一杯務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

新任理事としての挨拶文を考えるにあたり、遅ればせながら JADR の 50 周年記念誌を読ませていただきました。改めてこれまでの諸先生方のご苦勞があって今日の JADR の発展があることを認識した次第です。

個人的な JADR とのつながりの歴史は長く、1981 年に大阪で開催された学術大会にまでさかのぼります。当時私は新潟大学歯学部歯科保存学第二講座(現歯周診断再建学分野)の大学院 1 年生でしたが、留学した先輩の代わりに共同演者であった私が急遽ピンチヒッターとして発表することになり、原耕二教授と先輩助手の先生に連れられ、初めて参加した学会が JADR でした。それまでに学会というものに参加はもとより発表も行ったことはなく、生まれて初めての経験に大変緊張したことを覚えています。その後、大学院の 4 年生の時に新潟で開催されたときには、生化学講座の故野原廣美教授のご指導を受けた学位論文となる内容で研究発表をさせていただきました。IADR と JADR の関係や組織のことを知り、JADR が IADR を通して歯学研究の世界的な活動の窓口になっているということを知ったのもその頃だったと記憶しております。その後、IADR 大会で研究発表を重ね、海外の多くの研究者と交流を図ることで研究者としてのキャリアを積むことができたと思います。高野前会長がニューズレターの中で、「JADR は日本の歯科医学の世界への発信母体であり、将来の日本の歯科医学研究を担う若者が世界へはばたくカタパルトといえます。」と書いておられましたが、まさにその通りで、若い人たちが IADR, JADR で積極的に発表することを期待いたしますとともに、私自身もそのような指導をしていきたいと考えております。

近年、IADR 年次大会における研究発表に関しては日本の量的・質的貢献は多大なものがあり、米国に継ぐものであると認識しております。それが評価されて Hatton Award 本選への出場資格を与えられる Travel Award 受賞者の数も 5 名を数えるまでになりました。しかし、組織運営に関しては、それらに見合うだけの関与がされていないように思われます。全体のことは把握してはおりませんが、たとえば私が所属する Periodontal Research Group に関していえば、毎回の Group

meeting に出席する日本からの参加者の数は極めて少なく、Research group の役員の選出で不利になり、ひいては Council のメンバーとして IADR 本体の運営に日本の意見を反映させる機会が少なくなっています。JADR の歴代の役員を務めてこられた先生方の努力にも関わらず、このような状況があることは非常に残念なことです。

JADR の会員の一人一人が IADR において日本を代表する会員の一人であるという認識を持ちながら活動できるよう、微力ではありますが尽力していきたいと思っております。

8. JADR 理事に就任して

天野 敦雄

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座
先端機器情報学)

JADR 執行部の先生から理事をやらんかとお声掛け頂いた。JADR 理事就任を依頼されることは大いなる名誉であるとともに、この上ない重圧である。間、髪を容れず断るべきである。しかし、何故私のような雑会員に目を付けたのか不思議に思い、理由を推理してみた。① 人違い、② めぼしい人を登用し尽くし人材が枯渇した、③ かつて吉本のチャーリー・アマと呼ばれた私を起用し路線変更を狙った、④ 村上伸也・新会長はその慧眼により、本人すら気付いていない奇才とオーラを私に見いだした。真実一路を座右の書とする私は、素直に理由④を答とした。生涯ひた隠しておくべき秘密に気付かれてしまった迂闊は、小生にある。此処は腹を決めて、新会長の期待に応えたい。しかし、時差に耐えられない虚弱体質に加え、方向音痴の徴候もある。人名健忘は右肩上がりだ。もしかしたら JADR 理事には向いていないという疑念が一瞬脳裏をかすめたが、気弱は学究の徒には禁物だ。方向音痴と健忘症は人類における新たな進化の代償だという学説を聞いた気もする。極性を持たない繊維芽細胞こそ歯周組織における貴重な存在なのだ。それに、人の名前を覚えられないくらい、大したことではない。記憶喪失よりましだ。

歯周病菌研究のマニアである小生を知っている人は少ない。マニアに限られる。これから知りたいと思うフリークも稀少だろうが、自己紹介をしてみる。阪大の予防歯科に十数年、そして障害者歯科に籍を置き、3 度目の職場として先端機器情報学教室の教授をしている。「先端△△情報? 何ですかそれは」とよく聞かれる。「先端の秘密情報でも扱うんですか? ハハハ」というレベルの低いツッコミには聞く耳をもたないので、「よくご存じで」と応えている。確かにユニークな名前だが、自分で付けた名前ではないので命名の意図は気にしていない。まあ、私のことなどはどうでもよい。覚えてもらったところで、すぐに消えてしまう身であるから、最初から知らない方がよい。JADR の 70 周年企画で行われるであろう「あの理事は今?」のコーナーにも呼ばれはしないだろう。

平成 23 年度の国立大学運営交付金はさほど目減りしていない。あれだけ大騒ぎしたのにどうしたことか。国大協のレジスタンスの成果なのか、政府の腰砕けなのか。どちらにしろ財務省からも大学改革を求められることになった。上手に我が身を削りながら改革を進めていかなければならない。学際的大学院教育とキャリアパス支援カリキュラムの構築は必要だ。しかし、結局、閉塞感を打ち破るものはサイエンスの新展開しかない。

21世紀のJADRの使命は深遠である。村上会長の操舵を妨げぬよう、不惜身命の徒輩となり、惜しまれつつ早めに役割を終えたいと考えている。

9. JADR 理事を拝命して

柴田 俊一

(北海道医療大学大学院歯学研究科
口腔構造・機能発育学系組織学分野)

このたび、高野前会長のご推薦を受け、村上新会長のもとでJADRの理事を務めさせていただく事になりました。全力を尽くして任務に当たる所存ですので、どうぞよろしくお願ひ致します。

私の師匠は東京医科歯科大学歯学部解剖学教室の故一條尚教授です。先生からは解剖学の基本はもちろん、学問に対する心構えなど非常に多くの事を教えていただきました。ただ残念ながら解剖学教室全体としては日本解剖学会等基礎系学会の活動が主で、JADRあるいはIADRでの活動は活発ではありませんでした。しかしながら、黒田敬之IADR元会長、大谷啓一JADR元会長をはじめ、当時の東京医科歯科大学には本学会で活動されている先生方が大勢いらっしゃったため、個人的にはありますが、自然に本学会に参加するようになりました。最初にJADR総会に参加したのは細かい年代は忘れましたが、1980年代後半の大学院を卒業したてのころ、鶴見大学で行われたときと記憶しています。その学会では臨床と基礎の先生が一堂に会して議論をしていることにたいへん新鮮さを感じたことを覚えています。IADR総会への参加はさらにその後1992年のオランダでの大会が最初だと記憶しています。このときはその学会の規模の大きさに圧倒された事をよく覚えています。それ以後、可能な限りJADR総会、IADR総会に参加、発表するように心がけてきましたが、基礎系の学会だけでは目にする事のない演題、お会いする事のない研究者と遭遇する事で新鮮な刺激を受けることができ、私の研究の推進にたいへん役に立っていることは間違いありません。参加するたびに、帰路の飛行機の中で「ヨシマタヤルゾ。」とつぶやくのが今でも慣習になっています。

私は本学会への参加が遅かったため縁はありませんでしたが、IADRのHatton awardを通して、本学会が若手研究者の登竜門となっていることは、よく知られています。昨今の歯学部、特に私大歯学部に関する状況は大変厳しいものがあり、研究会活動も大いなる制約を受けている事は否定できませんが、そのなかでもやる気にあふれた、優秀な若手研究者は大勢います。私も可能な限りそのような若手をバックアップし、また当学会にも参加を呼びかける所存です。JADR理事として活動をすることで、私が受けた様々な恩恵に対して少しでも恩返しできれば、と考えております。

10. JADR 理事拝命のご挨拶

高田 隆

(広島大学医歯薬学総合研究科口腔顎顔面病理病態学)

この度、村上伸也会長のもとでJADRの理事を務めさせていただくことになりました高田でございます。このような大役を仰せつかるにはまことに微力ですが、歴代の会長・役員ならびに会員の皆様のご助言やご協力を仰ぎ、JADRの発展に貢献できるよう努めて参る所存です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

JADRには1987年に入会させていただき、国内にいながら国際学会の雰囲気を経験することのできる研究領域横断型の特徴ある学会として、参加させていただいております。1988年に、第36回JADR総会学術大会が広島で開催された時には、大会長の二階宏昌教授（現広島大学名誉教授）のもとで運営に関わらせていただき、JADRの熱気を目の当たりにさせていただきました。また、1999年には、当時JADR会長であった岡田宏先生のご高配により、第17回IADR韓国部会年次大会（ソウル）にて講演をさせていただく機会を頂戴し、当時進めておりました研究をまとめてNew connective tissue attachment formation on biomaterials for dental implantsと題して話をさせていただきました。同大会ではKim Ju-Whan先生（初代KADR会長、大韓民国学術院正会員）やChoi Boo-Byung先生（当時KADR会長）をはじめとするKADRを代表する先生方の温かい歓迎を受けたことを懐かしく思い出します。現在もJADRとKADRには密接な交流があり、さらにAsia Pacific Regionとしての学会開催など交流の輪が広がっていますが、この地域とりわけアジアからrole makingができるのではと大いに期待しております。一方、IADRにも海外の友人との再会もかねてしばしば参加し、2001年からはIADRからの指名でpublication committeeのmemberに加えていただきました。同委員会ではJADRから出ておられた村山洋二先生（現岡山大学名誉教授）に親しく声をおかけいただいたことに感激したことを、印象深く覚えております。この度の理事就任を機に、今後一層、JADRならびにIADRに発展に貢献できるよう精進したいと存じます。

さて、この度の理事ご指名の背景の一つは、本年10月8、9日に第59回JADR総会・学術大会を広島国際会議場で開催させていただくことにあるのではと拝察します。JADR本部との連絡を密にし、会員の皆様にとって実り多く印象深い学術大会としたいと思っております。なお、今回の大会では、広島大学歯学部創立40周年を記念して2006年より開催しているHiroshima Conference on Education and Sciences in Dentistryとの併催を企画しております。Hiroshima Conferenceには海外からの参加者が数十名参加しますので、JADR会員の皆様との交流の場となることを期待しております。多数の会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

急速なグローバル化の中で、我が国の歯科医学研究や教育を地域の特性を調和させながら発展させ、それぞれの機関・団体のglobal social responsibilityを如何に果たすかが大きな課題となっています。JADRにはもとよりIADRのmissionを共有し協働する必要がありますが、他の学会にはない分野横断的な学会という特性とIADRのDivisionであるという国際性を利点として、国内ならびにアジア地域に向けたJADR独自の目標設定と目標実現のための工程表の立案が求められてい

と思います。新理事として JADR の発展に少しでも貢献できればと考えております。何卒宜しくお願い申し上げます。

11. JADR 新任理事として

中村 誠司

(九州大学大学院歯学研究院
口腔顎顔面病態学講座顎顔面腫瘍制御学分野)

この度、村上伸也会長の御高配により JADR の理事を務めさせていただくことになり、大変光栄なことと心から感謝を申し上げます。ただしその一方で、私は IADR には積極的に参加をして参りましたが、JADR の活動には大した貢献をしてきておりませんので、理事を拝命して大変恐縮しているというのが正直なところです。私の専門は口腔外科学ですが、歯科医学の中では JADR の活動にあまり貢献をしていない分野の一つではないかと引け目を感じております。そのため、私の役割の一つは、口腔外科学を専門とする研究者あるいは臨床家を牽引してより積極的に JADR に参加し、JADR の運営ならびに発展に貢献することではないかと思っております。

JADR は日本の歯科医学の世界への発信母体であり、歯科医学および関連分野の研究促進、口腔保健向上や社会の公益への寄与に務めるとともに、国際的視野にたつて IADR の発展に貢献することにあるかと思っております。私の口腔外科学の分野では、従来から口腔癌、外傷、顎関節疾患、口唇口蓋裂などの研究が主体ですが、最近では Oral Medicine (口腔内科学) という分野が注目され、薬物療法が治療法の主体である口腔粘膜疾患、唾液腺疾患、神経疾患、心因性病態などに関する研究が盛んに行われるようになりました。世界的に見ても、日本におけるこれらの疾患の基礎的研究ならびに診療は高い水準にあると思っております。しかしながら、中国や韓国を始めとするアジア諸国の進歩は目覚ましく、特に再建やインプラント関連手術においては、企業との連携や政府の支援などにより積極的に新しい治療法の開発や実施に取り組んでいます。このように、領域によっては高い水準を維持しているとは言えず、アジアにおいてさえも日本の優位性が失われつつあります。またその一方で、口腔外科学に携わる若手の研究志向が低下してきているようにも感じています。さらに元来、口腔外科学に携わる人材の多くはその他の歯科医学に関する関心が薄いようにも思っています。JADR に積極的に参画することにより、その他の歯科医学との交流や連携が深まり、ひいては研究志向の向上にも繋がるのではないかと考えています。

個人的なことになりますが、村上伸也会長と始めてお会いしたのは 20 年以上も前になります。二人ともポスドクとしてアメリカで研究生活を送っていた頃で、お互いの親友である三宅健介先生(当時は同じポスドクでしたが、現在は東京大学医科学研究所教授)が村上伸也会長を連れて、私のバージニア大学を訪れてくれました。その時にお互いに歯科医師であることを知って意気投合し、夕食を御馳走すると言って、泊る予定ではなかったにも関わらず無理矢理に我が家にお泊めしたことを良く覚えています。その時の我が家の御馳走がカレーライスだったことは未だに笑い話になっておりますが・・・また、その頃は二人とも基礎免疫学の研究に従事しておりましたので、日本に戻ったらそれぞれの分野で日本の歯科医学の発展に貢献しようと誓い合いました。今から思えば、若かりし頃の熱い想い出です。その後の村上伸也

長の歯科医学における功績は目覚ましく、既に十分に日本の歯科医学の発展に貢献しておられます。その一方で、私などは村上伸也会長の足下にも及ばず、あの時の誓いは何だったのかと恥ずかしく思っております。この度、村上伸也会長の下で理事を務めることは、20 年以上も前の誓いを少しでも果せる絶好の機会であると思っております。微力ながら全力で JADR の運営ならびに発展に貢献する所存ですので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

12. 理事就任にあたって

桃井 保子

(鶴見大学歯学部歯科保存学第 1 講座)

本年度から JADR の理事に加えていただきました。私がかれまで本会に何か貢献したかということ、それについてはほとんど思い当たりませんので、女性を起用したい意向が働いたと考えています。男女共同参画社会基本法が制定されて以来、社会のあらゆる分野において女性の起用が強求められていますが、大変ありがたい事と思っています。同時に、先日、本会の 50 周年記念誌「JADR のあゆみ」を拝見する機会がありましたが、歴代の役員がいずれ劣らぬ大物ばかり、これら諸先輩の本会に対する貢献の大きさを知り、今回、理事を拝命することは、私にとってなかなかのプレッシャーでもあります。ともあれ、この機会に、今、社会は JADR に何を求めているのであろうか考えてみました。

平成 22 年に「日本学術会議からの提言 2010」が発信されました。これは、生命科学各分野における展望と提言を示したものです。全ての分野の報告が 4 つの柱のもとになされています。柱は、(1) 10～20 年程度の中期的な学術の展望と課題、(2) グローバル化への対応、(3) 社会のニーズへの対応、(4) これからの人材育成、です。私は、JADR は、このうちの「グローバル化への対応」と「これからの人材育成」を融合したところに係わっていると思っています。私の専門は保存修復ですが、長年この分野にいて実感していることに、わが国は研究開発で世界トップレベルにあるが、これを世界に発信しグローバルに展開していくことでは出遅れているということがあります。JADR が届くと、筆頭著者に日本人の名を見つけては喜び、その研究が日本の研究機関で行われたものであれば嬉しさもおさらです。ところがこのところ、韓国や中国の研究者と思わしき名が多く、これらの国々とはもはや友好的競争関係に入ったことに日々気付かされています。このような意味で、JADR は、若い人たちが自分の研究を世界に披露する志を、また国際的な場で論争に挑む志を育む場であることの最認識が必要だと思います。このために、卒業前・後のシームレスな場を提供していることや、第 55 回大会から英語使用が推奨され、第 58 回からは英語が義務化されたことは、高い見識からの判断と思いました。

また、日本歯科医学会が重点計画として挙げている 6 項目のうちの 5 番目が「国際連携の推進」であることにも注目したいと思っています。去る 1 月に開催された評議員会において、江藤一洋会長から各項目の説明をうかがう機会がありましたが、「国際連携の推進」ではとくに日本歯科医学会と JADR の連携強化に言及され、具体的には、国際的な窓口を持たない日本歯科医学会が JADR を窓口にとの提言がありました。本会は本来的に、IADR の日本部会ですから、わが国において

IADRに「もの申す」場合の唯一正式な機関としての役割を果たす事は重要です。しかし、これに加えて、日本歯科医学会の国際窓口を担うならば、JADRが歯科医学会の掌握する21の専門分科会と9の認定分科会とさらなる有機的な結びつきを深める事につながるのではではないでしょうか。

13. 理事就任にあたって

森山 啓司

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野)

向春の候、JADR会員の皆様におかれましてはますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、村上伸也会長のもとで新たに理事に就任させていただくことになりました。歴史と伝統ある本学会において会務運営のお手伝いをさせていただくことは誠に光栄の至りであり、重責に身の引き締まる思いです。JADRの役割はその名の通り、IADRの日本部会として歯学研究を通じて国内あるいは海外との学術的交流を促進することにあります。そしてなによりもDental Researchをキーワードにして世界から同好の士が集い、議論し、絆を深める場を提供することにあるのではないかと思います。このような活動を通じて歯学研究の発展に少しでもお役に立てれば望外の幸せです。

さて私が歯学部を卒業した1986年は、奇しくも母校東京医科歯科大学において第34回JADR大会が三浦不二夫大会長(元JADR会長)のもとで開催された年でした。日本を代表する歯学研究者が白熱した議論を展開する場を目の当たりにしてアカデミックな刺激を大いに受けるとともに、歯学研究に対する畏敬の念を抱くようになりました。また研究派遣先で生化学のご指導をいただいた佐々木哲先生(元JADR会長)は、当時JADR/IADRの会務に東奔西走される傍ら、折に触れてラポで学会の最新の話題を聞かせて下さいました。なかでも『2001年宇宙の旅』(1960年代後半に公開され人気となったSF映画)を引き合いに出しながら、「21世紀の初頭に日本にIADRがやってくる」と我々若い大学院生に教えてくださったことを印象深く記憶しています。やがて時は流れ、私が大学院時代から直接ご指導を仰いだ黒田敬之先生がJADR会長(1997年-1998年)、IADR千葉大会Local Organizing Chair(2001年)、IADR(2005年-2006年)会長を次々と歴任されました。師の薫陶を受けた者の一人として大変誉らしく思い、またJADRが世界の歯学研究の中で果たす役割の大きさを実感させていただく好機となりました。このような環境の中で研究生活を送らせていただくにつれ、JADRはいつのまにか身近な存在に感じられるようになり、同時に歯学研究の魅力にも自然に引き込まれていくようになりました。

我が国の科学を取り巻く環境は急速に変化しつつありますが、歯学研究が確固たる地位を保ちつつさらなる発展を遂げるためには、優秀な研究者をいかに育成し、かつインパクトのある研究を社会に発信し続けることにかかっています。JADRが今後果たすべき役割もこのような社会的背景と切り離して考えることはできないと思います。浅学非才な身ではありますが、JADRのさらなる発展のために粉骨碎身の努力をさせていただき所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りませうどうぞよろしくお願い申し上げます。

IV. 第88回IADR学術大会 (Barcelona) 報告

1. IADR Payton-Skinner Award for Innovation of Dental Materials を受賞して

広田 一男
(株式会社 ジーシー)

2010年7月14-17日にSpainのBarcelonaで開催された第88回IADRのDental Materials GroupのBusiness MeetingでPayton-Skinner Awardを受賞した。2010年3月にWashington DCで開催された第39回AADR総会で発表になったもので、仕事の都合で残念ながらそこには出席できず、Barcelonaで表彰を受けたものである。

日本人としてはじめての受賞となったPayton-Skinner Awardは歯科材料の進歩に貢献したDr. PaytonとDr. Skinnerを記念して設けられている賞で、歯科材料の創出に貢献したことが対象となっている。DMG会長のIndiana大学のPlatt先生から2月の初めに受賞のメールを受けたときは、全く信じられなかった。私の人生でも、微塵にも思いもかけていない予期しないことが起こることがあるという初めての経験であった。今でも信じられない思いである。しかしながら、私にとっては大変な名誉であると思っている。

背景には弊社の製品群に対して国内外、とりわけ海外での高い評価があるものと確信している。会社と私を育てていただいた大学、研究機関の先生方、臨床家などすべての世界中の関係者にまず感謝を申し上げたい。また、会社の評価は個人に対する評価ではなく、全体に対する評価であり、製品を創造する製造、営業、研究開発を中心に関係するジーシーのなかまにも感謝している。とりわけ、私と一緒に仕事をした研究開発の同僚のおかげである。また、30年以上にわたりジーシーの研究開発に携わり、構築された世界的な人的ネットワークも受賞に大きく関係したのは間違いないとも推察している。

私の場合、受賞対象は幅広く考慮されたものであろうが、核をなすものは大分昔に行ったアイオノマー関係の研究開発を中心に評価を得たものであろう。そのころはIADRでの発表や論文発表、特許の出願なども積極的に行ってきた。企業の研究開発者にとって重要なことは、社会に貢献できしかも会社の業績に寄与する製品を創出することがまずは第1である。製品の創出に続いて、特許、論文、学会発表の順番で重要と考えている。私の受賞をきっかけに、この4つのことに努力する多くの人材が、企業の関係者に続くことを祈念している。

振り返れば、私は大変に恵まれた環境、立場で研究開発の



DMG会長であったPlatt先生から受賞

仕事を続けられたことがこの受賞につながった。私も還暦を迎えたが、今後も1研究員として、歯科に関連する研究開発を続けられる環境があれば、それ以上の望みはない心境である。IADRでは歯科材料関係のAwardには他にもWilmer Souder Award, Ryge-Mahler Awardなどもある。日本の歯科材料に関係するすべての研究者が歯科医学の発展に貢献するため、新規な歯科器材の創出を行い、一層世界中から評価されることを願ってやまない。

2. The IADR/Unilever Hatton Awards 1st prize (Senior Basic Research) を受賞して

H.Niroshani Surangika Soysa
(東京医科歯科大学医歯学総合研究科硬組織薬理学分野)

I am honoured to have won the most prestigious award of IADR (International Association for Dental Research) under the senior-Basic category. I hope I could bring some credit to the Division of JADR, by competing with other divisions such as AADR (American division) and CADR (Canadian division). To enter the divisional IADR Hatton competition is also an arduous process which required a lot of hard work and dedication. For the divisional award many abstracts had been screened and the highest scored 10 individuals were asked to make a presentation before a panel of experts. Therefore to be able to enter the top 10 can be considered a privilege. In the final selections I did my best and entered the IADR Hatton award and competitions. This achievement, would not have been possible without the continuous help from my mentor, Prof. Keiichi Ohya, Head Section of Pharmacology at Tokyo Medical and Dental University. He was a pillar of strength and always encouraged me in my work. I was surprised to see him just before my final presentation in Barcelona, Spain to provide me with encouragement and good wishes. His presence in Barcelona boosted my confidence. At that very moment I felt confident that somehow I would receive the award and thereby bring credit to my institution, TMDU. In addition I wish to thank my supervisor Dr. Kazuhiro Aoki, Associate Professor at TMDU and my fellow colleague and husband Dr. Neil Alles. When I first entered the University as a graduate student I had only a little knowledge in this field. Therefore the help and the guidance I received from my professor and the supervisor during my PhD course was invaluable. I have several international publications and one was published in Journal of Bone and Mineral Research (JBMR) which is a prestigious journal in my field. This article received a commendation from the Faculty of 1000, a renowned post-publication online peer reviewed journal. The data I presented at the Hatton Award competition



The plaque of Hatton Award

is published in the journal 'Endocrinology'. Now I have returned to my home country, Sri Lanka and working as the Head/Senior lecturer at Division of Pharmacology, Faculty of Dental Sciences, University of Peradeniya. Since my winning at IADR I am expected to continue my work in this field.



With Professor Ohya, in front of the winning poster

Therefore with the help of Prof. Keiichi Ohya I wish to continue my work and have a good collaboration with his lab. I hope he will extend his helping hand in my future endeavors as well. The message I could give my fellow colleagues is with hardwork and commitment you can achieve whatever you want.

3. IADR/Heraeus Travel Award を受賞して

古谷 優

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座
(歯科保存学教室))

この度は、2010年7月に開催された第88回 IADR パルセロナ大会において、IADR/Heraeus Travel Award に選出して頂き、大変光栄に存じます。本賞は、IADR と Heraeus 社の後援のもとで設けられたもので、歯科材料学部門において斬新な研究手法の探索、ならびに新規材料の開発に携わる若手研究者に対して送られる賞です。受賞発表は、IADR 開会式で行われました。当日の夕方からは、受賞レセプションに招待されました。地中海を臨む屋外のリラックスした雰囲気の中で、今回受賞対象となったテーマを発表するという、大変貴重な体験をさせて頂きました。またその後の会食でも、日本では知り合うことの出来ない様々な研究者と交流することができ、非常に刺激的な経験をさせて頂いたと思います。

今回受賞対象となった研究テーマは、紫外線照射による歯の強化ならびにそのメカニズムについてで、この研究は私が大学院生として興味を持って進めているものであり、大変嬉しく思います。歯の喪失の主な原因の一つである歯根破折を防止するために、様々な方法が考えられてきていますが、我々は歯自体の強化も歯根破折の予防法になると考えました。そこで、ヒト象牙質に対し紫外線を照射すると、象牙質の機械的強度が照射前と比較すると2倍以上に上昇し、さらには1週間の水中浸漬後でも、照射前と比較すると有意に高いことを発見しました。この結果は、口腔内という過酷な状況下でも強化効果が保持される可能性を示しており、臨床においては有意義な結果であると考えております。さらに、レーザーラマン分光分析にて変化メカニズムを探索したところ、象牙質に多く含まれるタイプIコラーゲンの成分であるプロリンに化学的変化が起こっている可能性が示唆されました。今後は、この強化メカニズムを、コラーゲンの分子レベルで解明して行くことを目標としております。臨床応用を考えた場合、不明な点が多くまだまだ解明する点がありますが、この方法が将来の歯科治療の一助となることを心より願っております。

最後になりましたが、このような研究機会を与えて下さり、

またご指導を頂いております大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座（歯科保存学教室）の恵比須繁之教授、林美加子講師に心より感謝致します。また、これまでの研究にご協力頂いた諸先生方に厚く御礼を申し上げます。

4. The IADR Neuroscience Wiley-Blackwell Publishing Young Investigator Research Award を受賞して

辻村 恭憲

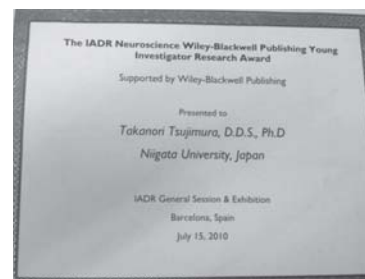
(新潟大学大学院医歯学総合研究科
摂食・嚥下リハビリテーション学)

この度、2010年7月14～17日に開催されました88th General Session and Exhibition of the IADR (Spain, Barcelona) におきまして "The IADR Neuroscience Wiley-Blackwell Publishing Young Investigator Research Award" を受賞いたしました。本賞は今回が第2回と新設されて間もない賞で、Neuroscience group が主催し Wiley-Blackwell 社がスポンサーとなっております。審査はポスターの前で口頭発表し、その後に質疑応答を受けるという形式で行われ、会場に入れたのは候補者と審査員のみでした。発表は何度も練習していたものの質疑応答には相当の不安がありましたが、拙い英語で懸命に説明し理解してもらえるよう心掛けました。

Neuroscience Group の Group Business Meeting において、President でいらっしゃる加藤隆史先生（大阪大学）から名前を呼ばれたときは、喜びよりも驚きが大きかったのを覚えています。御高名な先生方に何度も何度も「Congratulation!」と祝福して頂いたことは、とても嬉しく、そして光栄に思っています。受賞対象となった演題は "Involvement of NTS nociceptive neurons in an inhibition of swallows" で、三叉神経領域の侵害刺激により誘導される嚥下反射抑制の神経機構を行動学的・免疫組織化学的・電気生理学的手法を用いて検討したものです。研究の多くは日本大学の大学院時代に行った仕事であり、岩田教授の厳しくも暖かい指導のおかげで何とか形にすることができたと思っております。

超高齢化社会を迎えた日本では、要介護高齢者の多くが抱えている嚥下障害への対応は急務となっており、病院・在宅・施設を問わずその需要は今後も増え続けていくことが予想されます。このような日本における医療状況の中、歯科の国際学会において嚥下の基礎研究を評価して頂いたことは非常に意義深いと思っております。本賞を1つの糧としまして、嚥下に関わる基礎および臨床研究のさらなる発展のために研鑽を積みたいと考えております。

末筆になりましたが、本研究をご指導下さいました日本大学歯学部生理学教室の岩田幸一教授ならびに新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食・嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授、さらには実験を手伝って下さった共同研究者の方々にこの場をお借りして感謝いたします。



表彰状

V. 第58回 JADR 総会・学術大会報告

1. 第58回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会報告

大会長 西原 達次

(九州歯科大学歯学部歯学感染分子生物学分野)

平成22年11月20日(土)、21日(日)の両日、第58回 JADR 総会・学術大会を九州歯科大学本館および講堂にて開催させていただきました。運営に関しましては、高野 JADR 会長を始め、理事、協議員および会員の皆様のご支援ご協力をいただき、無事に終了することができました。あらためてお礼を申し上げます。

今回、International Association for Dental Research (IADR) 会長の Dr. Navarro に参加していただき、“How could JADR contribute to reducing inequality with improved oral research worldwide?” と題した特別講演で、世界各国の歯科医学研究を発展させていくうえで、JADR および IADR が果たす役割の重要性について話していただきました。KADR を代表して、Dr. Park に“Crosstalk between NFI-C and TGF- β 1 signaling regulates differentiation and homeostasis of tooth odontoblast” と題した特別講演をお願いし、象牙芽細胞の分化に関する解析結果を分子レベルで話していただきました。2日目には、Dr. Merritt (University of Oklahoma) による“LytTR regulatory systems: A novel class of signal transduction system in oral biofilm” と題した特別講演があり、現在の口腔内オーラルバイオフィームに関する研究をクオラムセンシングの視点で解説していただきました。

今回の大会では、3つのシンポジウムを企画し、それぞれの分野で活躍している先生方に口頭発表していただきました。このなかで、シンポジウム3では、北九州地区で展開している歯工学連携事業の一端を紹介したということもあり、歯学研究に興味を持つ九州工業大学工学部の大学院生と教員の参加を得て、今後の歯科医学の研究における一つの方向性を示すことができたのではないかと考えています。一般演題はポスター発表として、そのなかで、Young Investigator Award の選考、Hatton Award 日本代表者の発表、JADR Travel Award の選考などを行いました。このあと、それぞれのセッションを担当した先生方に印象記をお願いしましたので、詳しくは、そちらをご覧ください。

さて、今回の大会は、第58回目にして初めて九州での開催でした。あわせて、公用語を英語としての大会運営ということも初めての経験でした。このようなことから、Organizing Committee としては、参加していただいた皆様方にどれくらい満足していただけたかが気掛かりです。しかし、今後、JADR が世界をリードしていくには、研究成果を世界中の歯科医学界に、共通言語としての英語で発信していくということが大事になってきます。さらに、アジアのトップリーダーとしての力量を示すということも求められています。このような状況で、今回の北九州での開催が一つの先駆けとなれば、今回の大会を運営した我々としては、この上もない幸せと思っています。

それでは、末尾になりましたが、JADR および学会員の皆様方のますますの発展を祈念申し上げます。



IADR President Dr. Maria Fidela de Lima Navarro による特別講演



Dr. Joo-Cheol Park による特別講演



Dr. Justin Merritt による特別講演



西原大会長と来賓ならびに理事

2. シンポジウム 1 報告

自見 英治郎

(九州歯科大学歯学部歯学科分子情報生化学分野)

骨芽細胞は間葉系幹細胞から分化し、骨を形成する。骨芽細胞の分化過程は骨芽細胞特異的な細胞内情報伝達経路によって制御されている。1997年に小守らが、Runx2欠損マウスでは、骨組織や骨芽細胞が存在しないことを報告したことから、この転写因子が骨芽細胞分化に必須の因子であることが明らかとなった。そこで、本シンポジウムでは3人の演者にRunx2による骨芽細胞分化の最近のトピックスを紹介してもらった。

小守先生は骨格形成初期におけるRunx2の役割を明らかにするためにPrrx1プロモーター下でRunx2を発現するトランスジェニックマウスを作製したところ、構成的活性型FGF受容体を発現するトランスジェニックマウス同様に頭蓋骨癒合症や四肢発生の障害が認められた。これらの結果から、Runx2とFGFシグナルのクロストークが骨格形成を制御していることが明らかとなった。波多先生は、軟骨分化に重要な因子Sox5,6,9のコアクチベーターとしてDmrt2 (double-sex and mab-3 related transcription factor 2) を同定した。さらにこのDmrt2が初期軟骨分化を抑制し、後期軟骨分化を促進することで軟骨内骨化を調節することを示した。最後に、Ryoo先生は、ERKによるRunx2のリン酸化がRunx2の安定化やアセチル化に重要であることを報告し、Runx2の翻訳後修飾がRunx2の活性化に重要であることを明らかにした。



第58回JADR総会・学術大会の様子

3. シンポジウム 2 報告

柿木 保明

(九州歯科大学歯学部口腔保健学科摂食支援学)

このシンポジウムでは、本邦において4年制の歯科衛生士教育を行っている大学から4名の演者を迎えて、シンポジウムを行った。まず、天野先生が「Oral Care and Oral Health Provide Oral Health to People an All Life Stage」と題して、小児

から高齢者の各年齢層における口腔の健康とケアの重要性について述べた。次いで、山崎先生が「Periodontal Disease and Systemic Health」と題して、歯周疾患と全身の健康との関連性について報告し、寺岡先生は、「The Role of Dental Hygienists in an Aged Society in Japan」と題して、病院や介護保険施設等における歯科衛生士の役割と口腔ケアの重要性について報告した。最後に、引地先生から、「Oral Health Care Training in the New Dental Hygiene Education Curriculum in Japan」と題し、歯科衛生士教育が3年制以上へ移行したことによるカリキュラムの違いについて報告があった。

このシンポジウムでは、口腔ケアと口腔の健康に関連して、全身の健康との関連性や歯科衛生士の職務や教育などについて多面的な意見が述べられ、歯科衛生士育成ということだけではなく、学士教育という視点での口腔保健学教育のあり方について得るところが多かった。

4. シンポジウム 3 報告

冨永 和宏

(九州歯科大学歯学部歯学科病態制御学分野)

「Firm Bridge between Dentistry and Bio-sensing Technology」と題して、九州歯科大学と九州工業大学が全国に先駆けて展開している歯工学連携事業をMicro-bio-sensingを切り口として紹介しつつ、今後の学際的連携について議論した。この歯工学連携は九州歯科大学 Oral Bioresearch Center と九州工業大学 Research Center for Biomicrosensing Technology を軸として、共同研究だけでなく、大学院教育の充実も図っている。その現状を報告したうえで、共同研究の成果の一部を九州工業大学側から2名、九州歯科大学側から1名の研究者に報告していただいた。さらにそのような連携をうまく進めるポイントや双方にとっての連携の意義について議論を行った。歯学では医学に比べて検査機器の開発・普及が遅れているが、Micro-biosensingはそれを切り開く重要なキーと成り得ることから、新しい産業への発展が期待される分野であること、ならびに歯学と工学の双方を知る研究者の育成が重要であることが強調された。

5. ポスター発表報告

安細 敏弘

(九州歯科大学歯学部歯学科保健医療フロンティア科学分野)

今回の演題数は106題で、そのうちHatton Award候補者が5題、Young Investigator申請分が14題、また今年で4回目になるJADR Travel Award受賞演題は韓国から1題、一般演題が86題という内訳であった。発表はポスタープレゼンテーションのみで、とくに質疑の時間を設けずに自由討議形式で行われた。それぞれのポスターの前では、英語で活発な意見交換がなされていた。今回の大会では、海外からの発表者が20～

30名ほど参加していたが、今回から英語を公用語としたなかで、Discussionもスムーズに行われていたことが印象に残った。



Poster Discussionの様子

6. 学術奨励賞および Hatton Award 関連報告

後藤 哲哉

(九州歯科大学歯学部歯学科頭頸部構造解析学分野)

本大会での学術奨励賞 (Young Investigator Award) の選考は1日目の午後に一般のポスター発表とは場所を分けて行われた。14名の応募者の中から5名が選ばれ、夕方からのレセプションで受賞者の発表と表彰が行われた。受賞の有無にかかわらず、今回の応募者の研究のレベルは高く、選考では活発な討論が展開されていたことが印象に残った。Hatton Award 日本代表者5名については、1日目のレセプションで代表者の紹介が行われ、2日目の午後に Hatton Award 日本代表者の発表ならびに質疑応答がそれぞれ15分程で行われた。高野 JADR 会長の司会で、現 IADR 会長の Dr. Navarro を含む30名程の先生方の前で、緊張した雰囲気の中、3月に San Diego で行われる IADR 大会での活躍を期待して熱の入った質問や指導が行われた。



第58回 JADR 総会・学術大会会員懇親会における学術奨励賞表彰式

VI. 2010 年度学術奨励賞受賞報告

1. 2010 年度学術奨励賞を受賞して

朝日 陽子

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座)

この度、第58回 JADR 学術大会において、2010年度学術奨励賞を受賞させていただきました。歴史ある学術大会において、このような賞をいただきましたことを大変光栄に思います。学会会員ならびに評議員の先生方に心から感謝申し上げます。

我々の研究グループでは、新たなバイオフィルムのコントロール法を目指し、クオラムセンシングに着目した実験を行ってきました。クオラムセンシングは、細菌の産生する情報伝達物質であるオートインデューサーを介した情報伝達機構です。一部の細菌において、オートインデューサーがバイオフィルム形成に関与すること、またその類似化合物がバイオフィルム形成に影響を及ぼすことが報告されています。そこで、われわれは、オートインデューサーの類似化合物を *Porphyromonas gingivalis* に作用し、いくつかの類似化合物がバイオフィルム形成量を減少させることを明らかにしてきました。今回の発表では、類似化合物と抗菌剤の併用が、*P. gingivalis* のバイオフィルムに及ぼす影響について詳細な解析を行った成果を報告させていただきました。

今回の発表はポスターディスカッションであったこともあり、ポスターを見に来てくださった様々の分野の先生方と意見を交わすことができ、とても有益な学会となりました。また、新しい知識を得ただけではなく、多くのアドバイスをいただいたことで違った視点から実験を見直すことができ、今後実験を進めていく上でとても良い刺激を受けました。大学院修了後数年が経ち、自分自身が進むべき方向に何かと思悩むことがありましたが、このような若手研究者の育成を目的とした場があることは研究を続けていく上で励みとなりました。今回の受賞をこれからの研究の励みに、尚一層努力してまいりたいと思います。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり御指導いただきました、大阪大学恵比須繁之教授、野村由一郎先生、ならびに、御協力いただきました共同研究者の方々に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

2. 2010 年度学術奨励賞を受賞して

有吉 渉

(九州歯科大学 健康増進学講座 感染分子生物学分野)

このたび、北九州市で開催されました第58回 JADR 学術大会におきまして、荣誉ある学術奨励賞に選出され、誠に光栄に存じます。

我々の研究室のテーマの1つに、炎症反応における生体内高分子であるヒアルロン酸の生物学的機能の解析があります。今回、発表させて頂いた研究「CD44 Mediated Internalization of Aggrecan G1 Domain by Chondrocytes」もそのテーマの一環として行ったものになります。

関節領域において、軟骨細胞表面に結合するヒアルロン酸 (HA) は、プロテオグリカンであるアグリカンと結合してお

ります。このアグリカンが、力学的付加に対して、防御的に作用することにより、関節の保護作用を発揮することが多くの研究で報告されております。変形性関節症 (OA) の初期病態においては、このアグリカンがADAMTS4, ADAMTS5といったアグリカナナーゼという酵素によって、切断されることにより、この保護作用が失われます。

こうしたアグリカン分解産物が軟骨細胞において、どのような代謝を受けるかについては、ほとんど知見が得られていないのが現状です。アグリカナナーゼによるアグリカンの分解はアミノ酸配列に依存的で、結果としてC末端にITEGEというエピトープが形成されます。そこで、このエピトープを認識する抗体を作成し、アグリカン分解産物の代謝経路に関する検討を行いました。

ITEGE エピトープは、HA とともに細胞内にエンドサイトーシスという形で取り込まれることが蛍光免疫染色法および Western blot 法にて証明されました。また、このエンドサイトーシスの Key molecule として、HA の代表的受容体である CD44 に注目し、種々の CD44 阻害実験を行った結果、CD44 siRNA および CD44 dominant negative mutant の遺伝子導入、さらには CD44 ノックアウトマウスを用いた実験いずれにおいても、この ITEGE エピトープのエンドサイトーシスは強く阻害されることが示されました。この現象は、軟骨細胞だけでなく、滑膜細胞でも生ずることも確認されました。

これらの結果より、CD44 を介した HA-アグリカン分解産物のエンドサイトーシスが、OA の病態形成に強く関与していることが示唆されました。エンドサイトーシス後の詳細な代謝経路については、さらなる検討を行って行く所存です。特に、歯科領域におけるさまざまな炎症反応の制御ということを見すえ、トランスレーショナルリサーチとしての位置付けで、高分子ヒアルロン酸の臨床への応用ということまで、研究を進めていきたいと思っています。

今回の学会では、この分野でご活躍されております先生方から我々の研究に対して、多くのご意見、ご指導を頂く事ができました。これを励みに今後も研鑽を重ねていきたいと考えております。最後になりますが、私の研究に対して、日頃から温かくご指導くださる九州歯科大学の西原教授、East Carolina 大学の Knudson 教授夫妻、ならびにご協力頂きました共同研究者の方々にこの場を借りて、心より御礼申し上げます。

3. 2010 年度学術奨励賞を受賞して

岩崎 正則
(新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔健康科学講座予防歯科学分野)

2010 年 11 月 20, 21 日に九州歯科大学にて開催されました第 58 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会におきまして、2010 年度学術奨励賞を頂くことができ、大変光栄に感じております。

研究内容を簡単に紹介させていただきます。現代の食事に見られるオメガ 3 脂肪酸に対するオメガ 6 脂肪酸の高い摂取比率は種々の疾患を誘発することが指摘されています。そこで本研究は、オメガ 6 脂肪酸とオメガ 3 脂肪酸の食事摂取比率と歯周病との関連を経年的に評価することを目的としました。

2003 年に行われた歯周組織診査、質問紙調査、および簡易自記式食事歴質問票 (brief-type self-administered diet history

questionnaire: BDHQ) 調査に参加し、その後 2006 年までの 3 年間すべての歯周組織診査に参加した 75 歳高齢者 235 名 (男性 121 名, 女性 114 名) を本研究対象としました。歯周組織診査により clinical attachment level (CAL) を 6 点計測し、また BDHQ を用いて対象者の一日あたりの各オメガ脂肪酸の摂取量 (g) を推定しました。

歯周組織検査において診査部位各点で前年比 3mm 以上の CAL の増加が認められた場合に歯周病が発生、進行したものと定義しました。3 年間で歯周病が発生、進行した歯の累計を歯周病進行経験歯数として対象者ごとに算定し、歯周病の発生、進行の評価基準として用いました。オメガ脂肪酸の摂取比率が歯周病の発生、進行に与える影響を評価するため、性別で層化し、歯周病進行経験歯数を目的変数、オメガ脂肪酸摂取比率を説明変数とし、関連する共変数を加えたポアソン分析を行いました。その結果、女性においてオメガ 3 に比べオメガ 6 脂肪酸の摂取比率が高い者の歯周病進行リスクは約 1.5 倍であることが分かりました。

オメガ 6 脂肪酸の過剰摂取は炎症性疾患のリスクファクターとなる可能性が指摘され、逆にオメガ 3 脂肪酸には抗炎症作用があることが分かっています。両者は体内で相互変換が出来なく、また体内での代謝過程で互いに拮抗するため摂取バランスが重要とされています。本研究結果から日本人高齢女性においてオメガ脂肪酸の摂取比率を改善することが歯周病の予防・治療、さらに歯周病によって引き起こされる歯の喪失の防止に有効的に働く可能性が示唆されました。

今回の受賞を励みに、今後、歯科学にとどまらず、栄養学、薬学、免疫学等、さまざまな領域と連携し研究を進めてまいりたいと思っております。末筆ではございますが、この度の研究をサポートして下さったすべての皆様へ心より感謝申し上げます。どうも有り難うございました。

4. 2010 年度 JADR 学術奨励賞を受賞して

金 亨俊
(東京歯科大学歯学部第 5 学年)

この度、九州歯科大学にて行われた 2010 年度 JADR 総会・学術大会におきまして学術奨励賞を受賞することができ、大変光栄に思うとともに関係の先生方に心から感謝しております。簡単ではありますが、研究内容を一部紹介させていただきます。

細胞膜イオン信号は、生理学・病態生理学的細胞機能過程を調節する重要なシグナルであります。しかし、ヒト歯髄細胞におけるイオン信号については未だに解明されていないことが多く残されています。そこで不死化ヒト歯髄細胞における電位依存性 Na⁺ チャネルの生物物理学的特性とその発現調節を検討し、以下を明らかにしました。①静止電位は -29 mV である、②一過性内向き電流特性を示す電位依存性 Na⁺ チャネルが発現している、③細胞膜 Na⁺ チャネルの約半数が不活性化する細胞膜電位は -60 mV である、④歯髄細胞は電位依存性 Na⁺ チャネル α サブユニットアイソフォームである Nav1.1 から Nav1.9 を有している、⑤ブラジキニンは Nav1.1, 1.2, 1.8 の発現を増加させ、細胞内 Ca²⁺ 放出を活性化する、⑥歯髄炎症は、Na⁺ チャネル発現と開口を増加させる事で、歯髄細胞機能を駆動する。上記特性は、歯髄における炎症性反応で生成されたブラジキニンを含めたケミカルメディエーターが、歯髄細胞 Na⁺ チャネルの発現を増加させ、また細胞内 Ca²⁺ 信号

系を介して、その活性化と開口を誘発させる事を示しています。すなわち、歯髄細胞電位依存性 Na^+ チャネルは組織障害によって特異的に活性化されることを示しており、歯髄細胞機能調節の key player である事を示しています。歯髄細胞の電位依存性 Na^+ チャネルの生理学的な理解は、歯髄機能の本質的な理解を深め、また本チャネルを標的とした歯髄細胞代謝過程を調整する薬理的な活性物質（歯髄炎における歯髄療法薬剤等）の開発の第一歩となると考えられます。

学生という立場での研究活動でこのような賞を賜りましたことは、私自信の研究活動への意欲向上へとつながり、今後とも研究活動を重ねていきたいと思っております。本研究に熱心に御指導をくださった本学生理学講座 田崎雅和先生、澁川義幸先生、津村麻記先生ならびに病理学講座 村松敬先生にこの場をお借りしまして御礼を申し上げます。

5. JADR 学術奨励賞受賞報告

泰江 章博

(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
口腔顎顔面矯正学分野)

この度、九州歯科大学で開催されました第 58 回 JADR 学術大会におきまして、栄誉ある学術奨励賞を賜り光栄に存じます。簡単ではございますが、研究内容を紹介させていただきます。

口唇裂・口蓋裂患者は、裂隙閉鎖術後の癒痕組織・鉤縮により上顎骨劣成長や上顎歯列弓狭窄がもたらされ、その結果、重篤な不正咬合が引き起こされます。そのため矯正歯科治療は非常に困難となり、癒痕鉤縮に逆らって排列する動的治療後では、長期安定もなかなか望めるものではありません。しかし、これは逆に言うと癒痕形成の抑制さえ可能となれば、本疾患に対する矯正歯科治療は大きく飛躍することを意味します。そこで、現在私は癒痕形成抑制術の開発を目的として、Smad3 という分子を標的に研究を行っております。Smad3 は TGF- β シグナリングの主要な細胞内因子であり、そのノックアウトマウスの皮膚創傷治癒過程においては、単球浸潤低下に伴う炎症性反応の抑制ならびに再上皮化の促進が生じることが報告されており、これまで当研究室でも同マウス口蓋において創傷閉鎖が有意に促進し、一方で線維芽細胞の筋線維芽細胞への分化抑制、すなわち癒痕組織形成の抑制が生じることを明らかにしてきました。これらのごとく、我々は Smad3 遺伝子の局所における機能阻害により、癒痕形成の抑制効果が得られると期待し、Smad3 阻害剤を適用してまいりました。

創傷治癒・癒痕組織形成に強く関与する Smad3 遺伝子は、TGF- β シグナリング経路においてリン酸化されることでそのシグナルを下流に伝達することが知られていますので、Smad3 リン酸化の特異的阻害剤を成体マウス口蓋創傷形成部位に投与することでその癒痕形成抑制効果を検討しました。その結果、*in vitro* において線維芽細胞の TGF- β 1, MCP-1, MIP-1 α といった炎症関連因子の発現量低下といった Smad3 ノックアウトマウス由来線維芽細胞で報告されているのと同様の効果が認められました。また、*in vivo* においては薬剤投与群で明らかな創傷治癒促進効果を形態学的に認めました。本研究で用いている Smad3 リン酸化阻害剤は廉価な上、Smad3 リン酸化を特異的に標的とするため副作用もより少ないと考えられます。

今回の受賞を糧に、今後は分子レベルにおける本阻害剤の有効性の検討・確認を継続し、口蓋のみならず皮膚など医療

における広範な領域への応用を見据え、将来的には実用化に結び付けていきたいと思っております。最後になりましたが、本研究に関してご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。

Ⅶ. Report of 58th Annual Meeting of JADR – JADR Travel Award 2010

Gehoon Chung, DDS.

(Assistant at Department of Oral Physiology, School of Dentistry, Seoul National University, Seoul, Korea.)

Japan has been my favorite country since I studied for a year at Osaka University two years ago. However, when I was told to attend Japanese Association for Dental Research meeting held in Kitakyushu, I could not be just glad because I was to attend another meeting held at San Diego, USA on that week. As expected, I was very tired when I came back to Incheon Airport from San Diego. However, as I got on a plane bound for Fukuoka, the good memory of Osaka came up in my mind, and I became ready to enjoy another trip. Fifteen minutes of Shinkansen from Fukuoka took me to Kokura, a small but clean Japanese city.

It is well-known that Japanese basic science is highly developed and I could confirm it again at the meeting on the next day. What surprised me more was that all events were held in English. At the banquet in the evening, I was sat with several big professors in Japan. They were all very kind and the evening was very pleasant. I would like to express my gratitude to all of the professors and staffs working for JADR for giving me such a wonderful memory.

Ⅷ. 第 29 回 IADR 韓国部会 (KADR) 学術大会報告

JADR 副会長 高橋 信博

(東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野)

KADR と JADR は相互学術交流の一環として、それぞれの学術大会に特別講師を招聘しております。2010 年 11 月 20, 21 日に九州歯科大学で開催された第 58 回 JADR 学術大会には、ソウル大学 (Seoul National University) の Joo-Cheol Park 准教授が特別講師として来日され、Crosstalk between NFI-C and TGF β -1 signaling regulates differentiation and homeostasis of tooth odontoblast のタイトルで講演されました。そしてその 4 日後、同月 25 日にソウルで開催された第 29 回 KADR 学術大会には、私が招聘され、講演する機会をいただきました。

日本を発つ前日 (11 月 23 日)、韓国-北朝鮮国境で軍事衝突が生じ、1953 年の休戦以来、初めての民間人の犠牲者が出るという不穏な情勢の中、KADR 会長 Byung Moo Min 教授から出発当日の朝に届いた「Don't worry, be happy!」というメールを頼りに、新装なった羽田国際ターミナルからソウルに向

けて旅立ちました。機内では軍事衝突の記事が掲載された新聞が配られ、それに関するテレビニュースの放映が続く中、若干の不安を抱きながら晩秋の鉛色の曇り空が寒々と広がる金浦国際空港に降り立ちました。金浦空港は、軍事衝突の状況を映し出すテレビモニターの前に人だかりができています。警備を厳しくしているという感じはなく落ち着いており、これなら大丈夫と安堵しました。空港には Min 教授の教室の Teaching Assistantの方が迎えに来ており、空港からハン川沿いにソウル市内まで約 40 分のドライブの中、学術大会に向かう身としては珍しく政治の話となりました。平穏に見える韓国ですが、あくまでも休戦中であること、また徴兵制が続いていることから若い世代にとっても切実な問題とのことでした。ソウル大学歯学部は、Dental School 化して 4 年制としたものの、再び元の制度に戻して修了年限を短縮することですが、これは単に質の良い学生を集めるためだけではなく、徴兵時期への配慮もあるそうです。

到着した 24 日の夜は、韓国式のレストランにて KADR 役員の懇親会に招かれました。本 KADR には、次期 IADR 会長 (IADR President-elect) の Elizabeth Dianne Rekow 教授 (Engineering and Technology, New York University), IADR 副会長 (IADR Vice President) の Mary MacDougall 教授 (Institute of Oral Health Research, The University of Alabama at Birmingham School of Dentistry) が招待講演者として見えており、国際性豊かなパーティーとなりました。また、KADR 役員の中には日本で学んだ経験のある先生方が多く、改めて日本と韓国の歯科界の繋がりの深さを実感することができました。宴もたけなわとなった頃、KADR 会長の Min 教授から 2016 年の IADR 学術大会のソウル招致の話が出され、ソウル招致が KADR にとって長年の夢であることを熱く語るとともに、今回の IADR 副会長 MacDougall 教授のソウル訪問は、IADR 学術大会に相応しい施設が整っているかを審査することがその目的の一つであることを明かしました。私も発言を求められ、JADR は KADR と長年にわたり密接な関係にあることから JADR としても IADR 学術大会ソウル招致を支持していること、これを機にこれまで以上にアジアに目を向けていただきたいことを、JADR の立場から伝えました。今回泊めていただいた Grand Intercontinental Hotel は、コンベンションセンターやショッピングモールに隣接した現代的で機能的なソウル市内の南地区にあり、2016 年の IADR 招致が実現した暁には大会本部ホテル (Headquarter Hotel) に指定されるところです。

翌 25 日の KADR 学術大会は晴天に恵まれました。新装なったソウル大学歯科病院 (Seoul National University Dental Hospital) のホールと大講堂を使い、8:30 から Hatton Award Competition, 特別講演 2 演題、お昼をはさんでポスターセッション (57 演題)、特別講演 1 演題、そしてシンポジウム (4 演者) というスケジュールで行われました。特別講演では、Rekow 教授が Reliability predicting performance of new ceramic restorative materials という演題で、続いて私が A metabolic approach to oral microbial ecosystem in health and disease という演題で 1 時間ずつ講演し、午後の特別講演は MacDougall 教授が Getting to the root of the problem: genetic diseases altering root formation という演題で 1 時間講演を行い、その後のシンポジウム Dentin-pulp complex に繋げる形となりました。今回の特別講演は特定の研究分野に偏っておらず多くの会員にとって有益であったとのこと、私も少しはお役に立てたのかなと思いました。そのためか質疑応答も大変活発であり、若い学生が臆せず英語で

質問する姿勢は大変素晴らしいと思いました。シンポジウムはハングル語であったため、Min 教授のご好意によって、その時間を MacDougall 教授とともに歯科病院の見学に充てていただきました。

Hatton Award Competition は、発表内容を液晶プロジェクターで投影の上、英語で発表し質疑応答を行うという JADR の審査形式と似ており、今回は 7 人の候補者が発表し最終的に 2 名が選出されました。審査結果は閉会式で発表され、2 名の受賞者には、KADR 会長 Min 教授から「JADR に負けないよう頑張るように」との激励とともにプラークと副賞が手渡されました。応募者は総じて研究水準も英語による発表能力も高く、韓国歯学研究の今後の担い手の高いポテンシャルが感じられました。ポスター賞受賞者も同時に発表され、華やかな中で閉会となりました。

今回、招待講演者として KADR 学術大会に参加する機会を得、韓国の歯学研究水準の高さとその熱意に触れることができました。また、多くの知己を得、あるいは旧交を温めることができたことは、JADR の執行部の 1 人として将来に繋がる大変有意義な経験となりました。機会を与えていただきました全ての皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

IX. 理事会、評議員会および総会報告

JADR 幹事 馬場 麻人

(東京医科歯科大学大学院硬組織構造生物学分野)

2010 年度の理事会は、1 月 25 日、5 月 10 日、8 月 30 日、11 月 19 日の計 4 回開催された。

評議員会および総会は、第 58 回 JADR 学術大会時の 11 月 20 日に、会場である九州歯科大学において開催された。会の冒頭で評議員会成立のための定足数を満たしていることが確認され、柿木保明先生 (九州歯科大学)、三浦宏之先生 (東京医科歯科大学大学院) の 2 名が議事録署名人として選出された。

以下、評議員会および総会において決定された 2011 年度の事業計画および予算案等について報告する。

1) 2011 年度事業計画について

以下の 2011 年度事業計画が提案され満場一致で承認された。

理事会	: 4 回開催 (2, 5, 8, 10 月)
評議員会・総会	: 第 59 回学術大会開催時 (10 月)
学術大会	: 第 59 回学術大会 (10 月 8 ~ 9 日)
	広島国際会議場にて開催
	大会長: 高田 隆先生
	(広島大学歯学部口腔病理学教室)
各種委員会	: 学術奨励賞選考委員会の設置
Newsletter	: 年 2 回発行 (3 月, 9 月発行予定)
Mail News	: 年 4 回程度を予定
日本歯科医学会理事会出席 (陪席)	
KADR 学術大会へ講師派遣	
IADR 2011 年度評議会へ役員派遣	
APR 2011 年度運営委員会へ役員派遣	
2012 年度 Hatton Award 候補者選考	
IADR 各種 Committee 委員へ JADR 会員推薦	
IADR 本部へ JADR Annual Report 提出	

2) 2009 年度移行期会計決算および 2011 年度会計予算について

会計決算は、安孫子宣光監事ならびに大谷啓一監事による監査承認後、第 4 回理事会承認を経て、評議員会および総会において

満場一致で承認された。2011年度会計予算案も第4回理事会で承認を経て、評議員会および総会にて満場一致で承認された。

3) 倫理委員会規則の制定について

高野会長より倫理委員会規則案制定までの経緯について説明があり、原案が満場一致で承認された。(X. 倫理委員会規則参照)

4) 次期役員および評議員について

役員選出規程に従い、下記のJADR次期役員(案)が上程され、第4回理事会の議をへて、評議員会および総会で満場一致で承認された。また役員選出規程に従いJADR次期評議員の選出が行われ、理事会推薦評議員3名も併せ理事会承認をへて会長がこれを委嘱した。任期はいずれも2011年1月1日から2012年12月31日まで。

役員名簿 (2011-2012)

会長	村上 伸也	大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学分野
副会長	高橋 信博	東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野
前会長	高野 吉郎	東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科硬組織構造生物学分野
会計理事	山崎 和久	新潟大学大学院歯学総合研究科口腔生命福祉学
理事	天野 敦雄	大阪大学大学院歯学研究科先端機器情報学分野
理事	佐々木啓一	東北大学大学院歯学研究科口腔機能形態学講座口腔システム補綴学分野
理事	柴田 俊一	北海道医療大学大学院歯学研究科口腔解剖第二講座
理事	高田 隆	広島大学大学院歯学総合研究科口腔顎顔面病理病態学
理事	中村 誠司	九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面外科学分野
理事	西原 達次	九州歯科大学感染分子生物学分野
理事	桃井 保子	鶴見大学歯学部第一歯科保存学教室
理事	森山 啓司	東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科顎顔面矯正学分野
監事	小田 豊	東京歯科大学歯科理工学講座
監事	大谷 啓一	東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科硬組織薬理学分野

評議員名簿 (2011-2012)

北海道医療大学	安彦 善裕
北海道大学	亘理 文夫
岩手医科大学	佐原 資謹
奥羽大学	清浦 有祐
東北大学	島内 英俊
明海大学	渡部 茂
日本大学松戸歯学部	小方 頼昌
東京医科歯科大学	小野 卓史
東京歯科大学	石原 和幸
日本歯科大学	砂田 勝久
日本大学	松村 英雄
昭和大学	上篠竜太郎
神奈川歯科大学	浜田 信城
鶴見大学	大久保力廣
新潟大学	興地 隆史
日本歯科大学新潟生命歯学部	新海 航一
松本歯科大学	増田 裕次
朝日大学	渋谷 俊昭
愛知学院大学	戸苅 彰史
大阪歯科大学	田中 昌博
大阪大学	今里 聡
岡山大学	窪木 拓男
広島大学	丹根 一夫
徳島大学	田中 栄二
九州歯科大学	柿木 保明
九州大学	石川 邦夫
福岡歯科大学	高橋 裕
長崎大学	吉田 教明
鹿児島大学	野口 和行
千葉大学	丹沢 秀樹

東京慈恵会医科大学 杉崎 正志
国立保健医療科学院 三浦 宏子
(アンダーラインは理事会推薦評議員)

5) 終身会員推挙について

会則に従って、以下の会員(敬称略)が理事会より終身会員として推薦され、評議員会および総会において満場一致で承認された。

子田 晃一
下野 正基
村上 繁樹
森川 倡子

6) 2011 Hatton Awards 候補者の紹介

2010年度第3回理事会で決定された、2011 IADR San Diego 大会 Hatton Awards 日本代表候補者5名(五十音順、敬称略)が紹介された。

Senior Basic Science Category

高垣 智博
(東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科口腔制御学分野)
早野 暁
(岡山大学大学院歯学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野)
前菌 葉月
(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座(歯科保存学教室))
松田 真司
(広島大学大学院歯学総合研究科歯周病態学)

Junior Category

川田 健太郎
(九州歯科大学歯学部5年次生)

X. JADR 倫理委員会規則

(目的)

第1条 国際歯科研究学会(IADR)の倫理規定を規範としてIADR日本部会(JADR)所属会員による研究、学究活動における倫理的基準の維持、不正行為の防止を目的とする。

(設置)

第2条 前条の目的の達成のために、学会に倫理委員会(以下委員会という)を置く。

第3条 委員会は会長が必要に応じて招集する。

(業務)

第4条 会員による研究、学究活動に関する倫理的基準の維持、不正行為の防止。

2. その他、第1条の目的を達成するために必要な業務。

(審議事項)

第5条 会員による研究、学究活動に倫理上の問題、不正行為があることが判明した場合、あるいは疑われる場合その内容を審議の対象とする。

第6条 委員会は審議にあたり特に次の観点到留意しなければならない。

- (1) 個人の人権及び情報の擁護
- (2) 個人への不利益
- (3) 不服の申し立てを行なう権利

第7条 委員会の審議内容、議決は理事会に報告する。

(構成等)

第8条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 理事ないし評議員 4名
- (2) 医学・歯学分野以外の学識経験者 2名

2. 前項の第1、2号の委員は、会長が委嘱する。
3. 委員に欠員を生じたときは、これを補充することができる。
4. 委員会に委員長を置き、会長が指名する。
5. 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代理する。
6. 委員長が適当と認めたる者を委員会に陪席させ意見を聴取できる。

(委員会の開催)

- 第9条 委員長は、委員会を開催し、その議長となる。
- 第10条 委員会は、委員の3分の2以上が出席し、かつ、8条第1項第2号の委員の2分の1以上の出席がなければ会議を開くことはできない。

(議事)

- 第11条 委員会の議決は、出席委員全員の合意によるものとする。
- 第12条 審議経過及び議決結果は、議事録として保存し公表しないものとする。ただし、理事会が特に必要と認められた場合は公表することができる。
- 第13条 委員会の委員は、職務上知り得た情報を正当な理由なく外部に伝達してはならない。その職を退いた後も同様とする。

(不服の申し立て)

- 第14条 研究、学術活動の倫理上の問題、不正行為に関する審議内容、議決に不服のある者はその旨を理事会に申し立てることができる。

(補則)

- 第15条 この規定の変更は、理事会の議を経て、総会で承認を受ける。
- 第16条 この規定に定めるもののほか、この規則の実施に当たって必要な事項は、理事会が別に定める。

(附則)

この規則は、平成22年11月19日から施行する。

* IADR 倫理規定は IADR ホームページ (<http://www.iadr.com/i4a/pages/index.cfm?pageid=3562>) をご参照下さい。なお同規定の和訳については IADR ホームページに掲載いたしております。

XI. 第59回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会開催のご案内

大会長 高田 隆

(広島大学大学院医歯薬学総合研究科口腔顎顔面病理病態学)

会 期：2011年10月8日(土)～10月9日(日)
 会 場：広島国際会議場
 〒730-0811 広島市中区中島町1-5
 大 会 長：高田 隆 (広島大学大学院医歯薬学総合研究科口腔顎顔面病理病態学)
 準備委員長：栗原 英見 (広島大学大学院医歯薬学総合研究科歯周病態学)
 大会事務局：広島大学大学院医歯薬学総合研究科

歯周病態学研究案内

TEL：082-257-5660, FAX：082-257-5664

内 容：特別講演、シンポジウム、ランチョンシンポジウム、ポスターセッション、展示、その他

XII. 第89回 IADR 総会・学術大会 (San Diego, California) のレポーター募集

ご存知のとおり2011年3月16日(水)～19日(土)、San Diego (California, U.S.A.) で第89回 IADR 総会・学術大会が開催されます。つきましては、JADR 会員の先生方から IADR 大会の様子など9月発行予定の JADR Newsletter 第2号にご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。

レポーターをお引受けいただける先生は、大会報告を4月30日(土)までに事務局へお送り下さい。多数お待ちしております。

 字 数：1200字程度 締切：4月30日(土)
 執筆内容：第89回 IADR San Diego 大会に各自が参加した分野の報告。シンポジウム、ポスター、口頭発表などから自由に記載 (過去のニュースレター参照)
 原稿送付方法：TEXT file か MS WORD で、E-mail にて事務局へ送付

XIII. Hatton Award 応募候補者 (2012年度 IADR, Rio de Janeiro, Brazil) の募集

2012年度の Hatton Award 応募候補者を募集します。応募ご希望の方は5月以降にHPに掲載します応募要領をご覧の上ご応募下さい。

本賞は第10代 IADR 会長 Edward Hatton 博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior 部門、Senior- Basic Science 部門、Senior-Clinical Research 部門の3部門です。各 Division から推薦を受けた候補者は第87回 IADR 総会の前日に行われる Hatton Award 本選にて Poster-Discussion 形式での審査を受け、各部門上位2名が順位付けで受賞者に選ばれます。

なお、各部門への応募資格と研究内容の区分は、以下のようになります。

Junior 部門：

歯学部学生による研究発表です。歯学部在籍中に行った研究が対象となります。基礎研究、臨床研究を問いません。

Senior 部門：

大学院在籍者、研究生、専攻生等による研究発表です。博士号既得者の場合、本選時に博士号取得後3年以内であれば応募できます。

Senior 部門は、下記2つの分野に分かれます。

- ・ Basic Science Research: Involving laboratory or animal research
- ・ Clinical/Pre-clinical Research: Involving research on human subjects and/or epidemiologic studies

CONTENTS

I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して	1	I. Greeting of the New JADR President Dr. Shinya Murakami : JADR President	1
II. 会長任期を終えて	2	II. Recollection of 2 Years as JADR President Dr. Yoshiro Takano : JADR Past President	2
III. 新任・退任理事からの挨拶		III. Greeting from Director new appointment / retirement	
1. 理事退任に際して	3	1. On the JADR Director retirement	3
2. 理事退任のご挨拶 ーリサーチマインド涵養のためのパラダイムシフトー	3	Dr. Junji Tagami : JADR Past Director	3
3. 理事退任のご挨拶	4	2. Greeting from Director retirement	4
4. 第三の開国における JADR の役割	4	Dr. Tsukasa Sano : JADR Past Director	4
5. JADR 理事を退任するにあたって	5	3. Greeting from Director retirement	4
6. JADR 理事の退任にあたって	5	Dr. Hiroshi Nakajima : JADR Past Director	4
7. JADR 新理事を拝命して	6	4. Role of JADR in the third opening of Japan to the world	4
8. JADR 理事に就任して	6	Dr. Nobuhiro Hanada : JADR Past Director	5
9. JADR 理事を拝命して	7	5. On the JADR Director retirement	5
10. JADR 理事拝命のご挨拶	7	Dr. Nobuko Maeda : JADR Past Director	5
11. JADR 新任理事として	8	6. On the JADR Director retirement	5
12. 理事就任にあたって	8	Dr. Hiromasa Yoshie : JADR Past Director	6
13. 理事就任にあたって	9	7. Be appointed as a Director of JADR	6
IV. 第 88 回 IADR 学術大会 (Barcelona) 報告		Dr. Kazuhisa Yamazaki : JADR Director	6
1. IADR DMG Science Awards を受賞して	10	8. Greeting from the new JADR Director	6
2. The IADR/Unilever Hatton Awards 1st prize (Senior Basic Research) を受賞して	10	Dr. Atsuo Amano : JADR Director	7
3. IADR/Heraeus Travel Award を受賞して	11	9. As the new Director of JADR	7
4. The IADR Neuroscience Wiley-Blackwell Publishing Young Investigator Research Award を受賞して	11	Dr. Shunichi Shibata : JADR Director	7
V. 第 58 回 JADR 総会・学術大会報告		10. Greeting from the new JADR Director	7
1. 第 58 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会報告	12	Dr. Takashi Takata : JADR Director	8
2. シンポジウム 1 報告	13	11. Greetings from a new Director of JADR	8
3. シンポジウム 2 報告	13	Dr. Seiji Nakamura : JADR Director	8
4. シンポジウム 3 報告	13	12. Greeting from the new JADR Director	8
5. ポスター発表報告	13	Dr. Yasuko Momoi : JADR Director	9
6. 学術奨励賞および Hatton Award 関連報告	14	13. On the JADR Director appointment Dr. Keiji Moriyama : JADR Director	9
VI. 2010 年度学術奨励賞受賞報告		IV. Reports of the 88th IADR General Session in Barcelona	
1. 2010 年度学術奨励賞を受賞して	14	1. IADR Payton-Skinner Award for Innovation of Dental Materials	10
2. 2010 年度学術奨励賞を受賞して	14	Dr. Kazuo Hirota : GC, Co. Ltd.	10
3. 2010 年度学術奨励賞を受賞して	15	2. The IADR/Unilever Hatton Awards 1st prize	10
4. 2010 年度 JADR 学術奨励賞を受賞して	15	Dr. Niroshani Surangika Soysa : Tokyo Med. Dent. Univ.	11
5. JADR 学術奨励賞受賞報告	16	3. IADR/Heraeus Travel Award	11
VII. JADR Travel Award を受賞して	16	Dr. Yu Furuya : Osaka Univ.	11
VIII. 第 29 回 IADR 韓国部会 (KADR) 学術大会報告	16	4. The IADR Neuroscience Wiley-Blackwell Publishing Young Investigator Research Award	11
IX. 理事会、評議員会および総会報告	17	Dr. Takanori Tsujimura : Niigata Univ.	11
X. JADR 倫理委員会規則	18	V. Reports of the 58th JADR General Session	
XI. 第 59 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会 開催のご案内	19	1. Summary of the 58th Academic Meeting of JADR	12
XII. 第 89 回 IADR 総会・学術大会 (San Diego, California) の レポーター募集	19	Dr. Tatsuji Nishihara : Chairman of the 58th Academic Meeting of JADR	12
XIII. Hatton Award 応募候補者 (2012 年度 IADR, Rio de Janeiro, Brazil) の募集	19	2. Symposium 1	13
編集後記	20	Dr. Eijiro Jimi : Kyushu Dental College	13
		3. Symposium 2	13
		Dr. Yasuaki Kakinoki : Kyushu Dental College	13
		4. Symposium 3	13
		Dr. Kazuhiro Tominaga : Kyushu Dental College	13
		5. Poster Session	13
		Dr. Toshihiro Anzai : Kyushu Dental College	13
		6. JADR Young Investigator Award	14
		Dr. Tsutsuya Goto : Kyushu Dental College	14
		VI. 2010 JADR Young Investigator Award	
		1. Dr. Yoko Asahi : Osaka Univ.	14
		2. Dr. Wataru Ariyoshi : Kyushu Dental College	14
		3. Dr. Masanori Iwasaki : Niigata Univ.	15
		4. Dr. Hyungjoon Kim : Tokyo Dental College	15
		5. Dr. Akihiro Yasue : Tokushima Univ.	16
		VII. JADR Travel Award 2010	
		Dr. Gehoon Chung : Seoul National Univ.	16
		VIII. Report of the 29th KADR Academic meeting	16
		Dr. Nobuhiro Takahashi : JADR Vice-President	16
		IX. Report of the Board Meeting, Annual Business Meeting and the Councilor Meeting	17
		Dr. Otto Baba : Tokyo Med. Dent. Univ.	17
		X. The rule of JADR Ethics Committee	18
		XI. Announcement of the 59 JADR General Session	19
		Dr. Takashi Takata : The Chairman of the 59 JADR General Session	19
		XII. Call for Reports of the 89th IADR General Session in San Diego	19
		XIII. Call for the Hatton Awards Competitors of the 90th IADR General Session in Rio de Janeiro, Brazil (2012) from JADR	19

●編集後記●

今号より、村上伸也会長から JADR Newsletter の編集を引き継がせていただくことになりました。2011 年が明け、JADR は村上会長のもと新しい体制となりました。本誌には、高野前会長をはじめ昨年で退任された理事の先生方からの JADR への激励と、村上会長をはじめ新しい理事の先生方からの抱負が、交差しながら綴られています。JADR 総会・学術報告にあるように、ここ数年で学術大会の完全英語化が成し遂げられ、JADR は名実ともに国際学会となりました。国外においては、2 番目に大きな IADR Division として、Asia/Pacific Region の主要メンバーとして、リーダーシップを発揮することが期待され、国内においては、JADS (日本歯科医学会) との連携強化のもと日本の歯学の活性化の一翼を担うことが期待されています。JADR 会員の先生方一人ひとりが、ご自身の手で、日本と世界の歯学を変え発展させていくための素地は、既にできているのです。

気がつけばもう 2 月。例年になく雪が多く寒さが厳しかったこの冬も終わりに近づきました。新たな芽吹きの季節、JADR のさらなる発展を望みつつ。(√1)

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://www.soc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

連絡先: 〒 612-0802 京都市伏見区両替町 2-348-302

アカデミック・スクエア (株) 内 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773

JADR 副会長 高橋 信博 (東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野)

連絡先: 〒 980-8575 仙台市青葉区星陵町 4-1 FAX: 022-717-8297

2011 年 2 月 28 日 発行